

聞き取り記録

川合一良氏・葉子氏 「同学会・原爆展・女子学生懇親会等について」

〔解説〕

本稿は、1993年7月29日に川合一良・葉子ご夫妻に行った聞き取り調査の記録である。同調査は、『京都大学百年史』編集の一環として行われたもので、西山伸（京都大学文学部助手―当時）と、田中智子（京都大学大学院文学研究科博士後期課程―当時）が、ご夫妻のお宅に伺って実施した。

川合一良氏は、1950年に医学部（旧制）入学、1954年に卒業、川合（旧姓梯）葉子氏は1951年に文学部入学後転学部、1955年に理学部物理学科を卒業されている。おふたりとも、在学中には学生自治団体だった同学会を中心とした諸種の運動に関わっておられた。その中には、1951年7月に同学会主催で開催された「綜合原爆展」（以下、原爆展と記す）も含まれており、ご夫妻は1991年から原爆展に関する資料を収集して記録として残していくことを目的に「『原爆展』掘り起こしの会」を発足させて活動されていた⁽¹⁾。そこで、百年史編集史料室では当時の学生たちの活動についてご夫妻からお話を伺う必要があると考え、聞き取りの実現に至った。当日は、原爆展関係だけではなく、川合一良氏からはご自身が中央執行委員を務めておられた同学会の活動・組織・大学との関係等について、また川合葉子氏からは女子寮設置運動の中心となった女子学生懇親会についても語っていただいた。どのお話も、体験者でない

と知り得ない当時の雰囲気が伝わってくる内容であると言える。

百年史編集史料室の資料を引き継いだ大学文書館では、この貴重な記録はできるだけ多くの方に読んでもらう必要があると判断し、ご夫妻のご了解のもと、ここに聞き取り記録を公開することになった。ご夫妻に対し、改めて感謝申し上げる次第です。

以下、本稿の主題に関して簡単に解説を加えることにする。

（1）同学会について

同学会の直接の前身は、1913年発足の学友会である。学友会は、運動部を組織したり学内の運動大会を主催していた運動会（1898年発足）と、文化部を統轄する団体だった以文会（1909年発足）とが合同して発足したものであり、「会員ノ身心ヲ修養シ親睦ヲ計リ思想ヲ通融セシムル」⁽²⁾ことを目的としていた。その後、戦時体制が深まるとともに、全国の学校の学友会が報国団への改組を文部省から求められ、京大では1941年4月に同学会と改称して会員の修練を図ることとなった。戦前・戦中期を通して学友会・同学会は、会長に総長を、幹事あるいは顧問に各学部長を置くなど、学生相互や学生と教職員・卒業生の間の親睦を深める組織であった。

そのような性格は敗戦とそれに伴う教育改革に

よって大きく変化する。1946年12月に定められた同学会規則では、「学生の自治により学生生活全般の発展向上を計る」⁽³⁾と同学会が学生自治団体であることを明記し、諮問に応じる中央顧問に総長や学部長・学生部長・事務局長を配しているものの、学生から選出される協議委員の互選で定められる中央委員長が事業全般の運営にあたとされた。さらに、学内団体はすべて同学会の部として取り扱われ、学生は入会金・会費を入学金・授業料とともに納付することが義務づけられており、全学の学生を組織する形となっていた。

改編当初の同学会は、政治色も強くなく、敗戦直後の生活難への対応が主要な関心であり、1949年に入っても大学管理法などへの反対闘争に際しては、法案反対は表明したものの、街頭デモやストライキ決行を主張する各学部自治会に対して賛同していなかった。ところが、1949年12月の協議委員選挙において左派の民主統一戦線派が多数を占めるようになってから、大学側との対立が強まっていくことになる。一方大学側も、レッド・パージ、朝鮮戦争と冷戦構造が固定化していくなかで、学生運動に対する規制を強める路線を採るようになり、両者の間には様々な事件が起きて、学生の処分や同学会の解散なども命じられていく。川合一良・葉子両氏が在学していた頃は、この大学側と同学会との対立が本格化し始めた時期にあたることになる。

参考までに、本稿に関係する事項を年表にまとめると以下のとおりになる。

- 1949年4月 看護婦事件
- 9月 同学会、全学連脱退を決議
- 12月 協議委員選挙、民主統一戦線が多数を占める
- 1950年4月 同学会、全学連復帰を決議
- 6月 同学会を中心とした学生、レッド・パージ反対のデモ・ストライキ実施

- 10月 告示9号公布、学生のストライキを禁止
- 同学会、レッド・パージ粉碎全学決起大会開催、4学生処分
- 11月 前進座事件 36学生処分
- 12月 鳥養学長、中央執行委員の改選を求める旨の談話発表
- 1951年1月 同学会中央執行委員改選
- 2月 学内集会規程・学内団体規程達示
- 3月 学内掲示等規程達示
- 5月 春季文化祭で原爆展実施
- 7月 総合原爆展開催
- 11月 天皇事件 同学会に解散命令
- 1952年6月 経済・理・文・農・医・吉田分校学生大会で、破壊活動防止法に反対してストライキ決議
- 1953年6月 同学会再建、体育会発足
- 1954年5月 女子寮開寮
- 6月 吉田分校で水爆展開催

(2) 総合原爆展について

1951年5月14日から20日まで開催された春季文化祭において、理学部と医学部の学生たちによりそれぞれ別個の形で原爆に関する展示が行われた。京大理学部と医学部では、広島に原爆が投下された直後から調査研究班を現地に派遣しており、この時の展示も、戦争への危機感が深まりつつある時代状況のなか、調査班が収集した資料も出品されたほか、木村毅一理学部助教授と天野重安医学部助教授の講演も行われて、好評を博した。総合原爆展は、これを受けて同学会が主催したものであり、全学的に規模を拡大して行われることになった。期間は7月14日から24日まで、京都駅前の丸物百貨店（現近鉄百貨店）の5階を会場に行われた。原爆の原理、被害の状況、国際管理の実態、関連文学など、それぞれの学部の学生が専門を生かして190枚のパネルを制作して展示し

たほか、画家丸木位里・俊夫妻の制作になる『原爆の図』が第1部から第5部まで展示された。このうち4部と5部は、この原爆展で初公開されたものであった⁽⁴⁾。当時まだ占領下にあった日本で、原爆の被害を学術的な観点から展示という手法で示したのは初めてのこととされている⁽⁵⁾。会場には約3万人が訪れ、大きな反響を呼んだ。一方、これに連動して、京都市内や周辺都市で原爆に関するスチール展が開催されたが、その中には開催が制限されたり禁止された場合もあった⁽⁶⁾。

(3) 女子学生懇親会について

女子学生懇親会⁽⁷⁾については、今のところ『学園新聞』以外の資料が見つかっていない。初出は1951年7月1日付の紙面で、6月16日に女子学生30人が集まり、今後親睦会を組織していくことが決められた、とある。女子寮の建設が必要であるということはこの時期から女子学生の間では主張されていた⁽⁸⁾が、本格的に動き出すのは1953年に入ってからのものである。5月25日付・6月8日付の紙面に立て続けに、女子学生懇親会が女子寮の建設を目指して学生部と交渉を行っていることが記事になっている。花谷会館の2階に集会室を設けていること、新入生歓迎会で意見交換が行われたことなど、本稿で詳しく語られている内容が簡単に書かれている。そして、結局翌1954年に吉田山の西麓にあった農学部橋本記念会が所有していた橋本記念館を女子寮として使用することが決まり、6月から入寮、その選考は女子学生懇親会が行うことになった〔1954年5月24日付〕⁽⁹⁾。

〔註〕

- (1) 「『原爆展』掘り起こしの会」の活動や、原爆展そのものの内容については、のちに小畑哲雄『占領下の「原爆展」 平和を追い求めた青春』かもがわ出版、1995年、にまとめられた。
- (2) 学友会規則第1条。京都大学百年史編集委員会

編『京都大学百年史』資料編2、2000年、325ページ。

- (3) 前掲『京都大学百年史』資料編2、496ページ。
- (4) 丸木夫妻は、広島に原爆が投下された直後から現地に赴き、救援活動に参加しており、『原爆の図』はその体験をもとに制作されたものであった。なお、『原爆の図』は最終的には15部まで制作され、現在は1部から14部までを東松山市にある丸木美術館が、15部を長崎原爆資料館が所蔵している（丸木美術館ホームページによる。
<http://www.aya.or.jp/~marukimnsn/index.htm>）。
- (5) 松尾尊允『国際国家への出発』日本の歴史第21巻、集英社、1993年、150ページ。
- (6) 前掲『占領下の「原爆展」 平和を追い求めた青春』40～47ページ。
- (7) 同会については、1951年から女子寮が置かれる1954年までに『学園新聞』に管見の限りで8回記事が掲載されているが、「懇親会」（5回）「懇談会」（3回）と名称が二種類に分かれている。本稿では、前者の方が僅かながら多数なのと、寛久美子「仮女子寮（橋本記念館）の一時期、そして角南（厚生課長）先生」（京都大学創立九十周年記念協力出版委員会編『京大史記』六甲出版、1988年、644ページ）に「懇親会」と書かれていることに鑑み、「懇親会」と表記する。
- (8) やはり同じ1951年7月1日付の紙面に女子学生座談会が掲載されており、大学に対する要望の最初として挙げられているのが女子寮の建設だった。
- (9) しかし、もともと古い建物だった上に、角南厚生課長の名義で借用するという変則的な形だったため、正式な女子寮を求める声は強く、1959年6月に田中関田町に現在の女子寮が開寮した。

（本解説および聞き取り記録の註記の作成は西山伸く京都大学大学文書館助教授）が行った。また、聞き取り記録中、用語や氏名等の補足には〔 〕を、文脈の補足には（ ）を使用した）

[聞き取り記録]

西山 今回の聞き取りでは、大きく分けて二つ、同学会のことと、原爆展のことをお伺いできればと考えております。まず最初に、確認ということで、先生の大学入学前後のご経歴からお願いいたします。

川合一良 生まれたところからいくと、1930年生まれです、昭和5年ですね。敗戦の年が中学3年だった。それから、岡山にあった旧制の第六高等学校で3年間過ごしてから、1950年に京都大学の医学部に入りました。そして、51年の1月に同学会が改選された時に中央執行委員になりました。1月というのは、その前の年に「前進座事件」⁽¹⁾というのがあって、中央執行委員長だった水口〔春喜〕さんという方が放学処分、その他大量処分があって、そういうことで一時同学会が大学から否認される形になったことがありました。それで、大学とはその後もずっと対峙していたわけですが、それでは交渉もできないということで、新しいメンバーで同学会を1月に作ったんです。そして、6月か7月に正規の改選があり、その時にはもう中執を降りています。その後は、医学部の中とか、それから吉田寮にいましたから、寮の中のいろんな仕事とかをやっていました。医学部ではインターン廃止闘争が中心でした。寮では、あの頃はね、団体等規正令とかいろんな法律ができて、それを契機に、京都府寮連合⁽²⁾というのができるんですよ。その初代委員長になっています。それで、卒業は1954年、(昭和)29年ですね。

西山 医学部は、当時何回生まででしたか。

川合一良 当時は4年間です。で、普通の学部は3年だった。僕らの時には、いわゆる旧制と新制と、それにおまけに臨時編入というのがあって、非常に複雑でした。

川合葉子の方は、51年に文学部に入学して、翌年理学部に移学部し、55年に物理学科を卒業

しています。その間は、同学会の代議員などいろいろやっていましたが、女子懇にも所属していました。

川合葉子 懇談会か、懇親会だったか。

西山 当時は1回生は宇治⁽³⁾ですか。

川合一良 新制の場合はね。旧制は最初から学部ですから。教養部と称するものが、宇治と吉田にあったわけです。で、宇治分校が1回生で、吉田分校が2回生、そこから各学部へ行くという、そういう形になっていました。

西山 先生は始めから・・・。

川合一良 僕は最初から医学部の方。

西山 葉子先生は宇治ですか。

川合葉子 宇治を通ってきました。火薬庫がありましたでしょ。火薬庫の建物が残ってるんですよ。探検がいくらでもできましたけど。

西山 では、準備いたしましたものに沿って始めさせていただきます。まず、ご在学中の同学会について先生の方から思いつくままお話しただいて、その後にこちらから質問いたします。

川合一良 私が医学部に入ったのが50年、その前の年に「京大病院事件」⁽⁴⁾というのがありました。学生が2人放学になったり、4人が無期停学になったりいろいろありました。当時私は六高におって、京大から来た先輩が、いろいろ話をするのを聞いただけしか知らないですけどね。発端は、当時は看護学校とは言わずに厚生女学部と言ったのかな、そこを卒業して看護婦さんになる予定だった人を10人不採用、それは活動家だったからですね。それがけしからんということから始まりました。当時は職員組合もかなり組織率が高かったらしいですね。だから、医学部の職組、医学部班ですか、医学部分会ですかね。そこのチーフは平沢〔興〕先生、のちの総長がやっているというふうな、そういう時代だったそうです。それが、病院事件で大

もめにもめて、結局学生の方は処分になるし、職員の方は職組が医学部についてはほとんどつぶれてしまう。本当にもう、数名ないし十数名しか残らないくらいになってしまって、平沢さんとか全部脱退したわけですね。そういう時代だったそうです。

ところが、その頃同学会に関しては、その前の歴史があるんでしょうけど、いわゆる官製の形ですね。つまり大学側から部室と、それから職員2名が派遣されて、会費も全部授業料と一緒に集めて渡してくれるという、そういう形だったんです。当時民統派⁽⁵⁾と呼んでましたけど、言うなれば左翼ですね、それがちょうど1950年頃に多数をとるわけです。で、広谷喜一郎さんという、経済の学生が同学会の委員長になりました。当時の同学会は、ご存知のとおり文字通りの全学組織でね、傘下には各学部の自治会があるし、それから運動部だとか研究部だとか文化部だとか厚生部だとか、そういうものがずっとあるわけですね。いろんな学内の自治組織と、それからサークル全部が入っていたという、そういう組織だったんですよ。私が入った頃はそういう状態で、かなり活発に活動していました。

その頃にウイロビー書簡⁽⁶⁾というのが出るわけですね。それから京都市においては公安条例⁽⁷⁾が施行されて、いろんな集会が難しくなってくる。もう一つ、大きな時代的背景としては、GHQの方針転換があるわけですね。ニューディール派が追放されていって、そしてレッドパージがずっと進行して、日本共産党の幹部が追放される、ということがありますね。で、危機感が非常に強くなってきていました。朝鮮戦争がいよいよ始まって、かつての非常に明るかった・・・、本当に戦後の解放というのはね、信じられないくらい我々にとって明るい感じだったんですよ。それがまた非常に暗くなっていく

ということですね、いわゆる活動家とかそんなだけじゃなしに、一般にかなりそういう危機感が強かった。もう一つ前の頃、昭和で言うと23年当時、旧制高校というのは、例えば六高の僕のクラスは40人くらいでしたけど、三分の二ほどが共産党や青年共産同盟など何らかの左翼の組織に入っているという時代でした。そして、共産党の代議士が(1949年1月の衆議院議員選挙で)35名当選するという時代があった後に、レッドパージが強行されていくわけですね。

だからそういう非常な高揚期を迎えて、しかも弾圧が目に見えてくるという、そういう時代背景を持って京大に入学したわけです。入った当時は、京都ではまず市長選挙があって、それから知事選、参議院選があり、当時民主戦線統一会議、民統会議と言いましたけど、それがありましてね、今の高島屋のところに公衆会館というのがありました。劇場ですね。そこで何か集まってやっていたのを覚えていますけど。だから、本当に社会党共産党が、がっちり手を握ってね、それでもって高山〔義三〕市長、蜷川〔虎三〕知事、大山〔郁夫〕参議院議員という、こういう民統会議の候補が当選するわけですね。だから、京大に入るなり、何だかそんな運動ばかりやっていた記憶があります。そして、その年の秋頃からレッドパージが始まりました。GHQのイールズ⁽⁸⁾という人が全国の大学をまわるわけですね。まず新潟大学、それから東北大学に行ったんだっただけかな、さらに北大にも行ったりして、それでレッドパージをせよと迫るわけですけど、その反イールズ闘争というのがありますね。で、京大では、そういうところまで来ていなかったけど、多分レッドパージが行われるだろうと言われていた。それでレッドパージ反対闘争、全学の決起集会をやるわけですね。

その前に告示9号⁽⁹⁾が10月16日に出ている

のです。今度の原爆展のことで、私は最初に当時の角南〔正志〕学生課長さんにお会いしたんですけどね、まず角南さんが言われたことは、告示9号については僕は心外なんだ、ということでした。実はあの原文は自分が書いたと言われました。自分の真意は、京大においてはレッドパージはしない、だから学生も自粛してストライキはせんといってくれ、ということを書いたんやと。事実京大ではレッドパージはなかった。京都では府立医大でレッドパージが行われています。ところが、その告示9号が一人歩きして、処分の根拠にされた。それで自分としては非常に心外に思っていると。そして、レッドパージ粉砕闘争の決起集会があり、その時に田代〔秀徳〕輔導部長と角南学生課長が大会に参加しているのです。参加して、別に禁止しなかったのですからね、その意味じゃ合法だったわけですね。にもかかわらず、その直後に、あれは何でしょうね、学部長会議か輔導会議か、が行われて、4学生が処分されました。『学園新聞』〔1950年11月1日付〕に出てますけど角南さんがこの時涙を流して両脇を抱えられて出てきたというシーンがあって、辞意を表明するということがあるわけですけどね。で、この頃から角南さんの意思に反して告示9号は動き出しているというようなことがあった。

この年の11月22日に「前進座を囲む会」という集会があって、これはね、河原崎国太郎さんと呼んできて、モリエールの座談会をやるという、そういう非常に文化的な集会だったんですよ。だから一旦大学が許可しているんです。ところが、禁止になるわけですね。で、後に角南さんが言っていたのでは、ウイロビー書簡だったようです。「ウイロビーが出たからなあ」という言い方をしていました。それは、この前お会いした時の話ですけどね、当時はそんなこと言いませんよ。だから、なぜ禁止するのだと

いうことでもめたのですけどね、大学は頑としてそれを言わないわけです。どうも川端署から言ってきたようですね。それで、禁止すると。ところが、学生はそれはけしからんというわけで、警察が乗り込んでくるんですけど、その車の前に寝てね、それを阻止する。で、もみ合いになって結局集会はできなかったんです。そこで全学の抗議集会やって、もちろん大学は許可しない。不許可の集会を強行したものですから、この告示9号にもとづいて、36学生というかつてない大量の処分になるわけです。これは、角南さん、自分がはっきり関与していると言ってまして、それから、また抗議集会をやり追加処分が出た。当時はストライキを決議する集会をやった場合には、議長と提案者は無期停学、それをもう一回やったら放学という、そんな取り決めみたいなのがあったんですね。だから、大学の認めない集会を繰り返してやったものから、追加処分がされたということです。

それで、学長が同学会中執の改選を求めるという発言をするわけですね。そして、1月26日代議員会で中央執行委員会の選出が行われて、この時最初は木村〔祐二郎〕さんという経済学部の学生が中央執行委員長になるんですけど、病気で、結局全然活動ができないままに辞めるんです。そこで同じ経済学部の青木〔宏〕さんが、中央執行委員長代行ということで、それがある時期に正式に委員長に就任しています。

さらに、2月からこういうものが出てくるわけですね、学内集会規程。3規程ありましたかね⁽¹⁰⁾。これは覚えてなかったんですけど、『学園新聞』を見てみると、かなり重視して書いているようですね。このことについてのピラ⁽¹¹⁾が、医学部学生の村上〔宏〕さんが保存していたのがあるんですね。だから、この時はかなり、いろいろ反対の動きをやっているわけですね、京大同学会としては。だけど、撤回しないで、こ

のビラ自身も「輔許第1号」というハンコを捺して出しているというナンセンスなことが起きているのです。一枚一枚ビラにハンコを捺さなきゃいかんというのが最初はあったみたいです。

西山 輔導部に持って行って、これでよろしいですかと……。

川合一良 そうです。かなりそういう反対運動は同学会としてはやったようだけど、学生大会を開いて決議するというようなことはやっていない。事実としては、実際上はこれもなくなってますね。どんどんビラ出ますから。こんな許可のないビラがね。空文化してくるんですよ。

川合葉子 業務として、大変でしょ。

川合一良 事実できないですよ、そんなこと。それと同じ頃「小野君事件」⁽¹²⁾というのが起きているんですよ。小野信爾さんという文学部学生が占領政策違反で逮捕されたのです。その時にこれけしからんと抗議運動をやっています。しかし、学内集会規程自身をテーマにした集会というのは、そんな大規模なものではなかったと思うんですけどね。ただまあ、後に同学会解散なんかする時は、これ生きてくるわけですね。規則というのは妙なものだけど、そんなものですね。

西山 そういたしますと、事実上この集会規程よりも、その前年10月の告示9号の方が、学生に対するインパクトがずっと大きかったと解釈してよろしいですか。

川合一良 その通りです。

西山 告示9号は1950年10月ですので、先生が入学されてからまだ半年くらいしか経っていないわけですけど、これが出る前と、出た後とは、かなり雰囲気とか実際の集会に対する規制とか、変わってきたわけですか。

川合一良 全然違う。

西山 それまではどういう感じでしたか。

川合一良 その直前にはね、何か集会がもたれますよね。とにかくこれ以前は、私が入って僅かな期間ですけど、処分という問題はもちろん全然なかったしね。だから、その前にあった「病院事件」の時も、あれは学生の本分にもとったとか、確かそういう理由で処分されているんですね。ところがこれ以後は、全く機械的にこの告示9号をあてはめていってね。これ以後というのは、ずいぶん学生大会やってスト決議やっているわけです。いろんなテーマでね。この頃、全学連が完全に一本でしたからね、全国のほとんどすべての大学および高専などの自治会を組織していましたから。全学連が何らかの要求でストライキを決めると、各大学でざあっとやるわけですね。京大でも全部の学部で学生大会をやりました。だいたい、文学部がまずやって、経済、法などの文系、それから理学部あたりですかね、そのへんがまず成立するわけですね。成立し、そこでストを決議したら、さっき言った議長と提案学生は停学ということになるんです。医学部はだいたい学生大会が成立しないんです。いくら提案しても成立しないから、大学がこれは学生大会じゃない、したがって処分しない、という形だったですね。その後、それがずっと一貫して続いてきて、いつ頃空文化するのかな、かなり後の方でしょうけどね。もちろん、バリケードとか作られる時代には、こんなものどこかに吹っ飛んでますね。相当長く生きていたことは事実です。

西山 この告示9号が出される前にも、いろんな集会を開いたりとか、スト関係の決議をしたりとかはあったのですか。

川合一良 スト関係は……、全学連が関係したものが何かあったんじゃないかと思いますがね。まあ、その間、わりに学内は平和でしたね。ストックホルムアピール⁽¹³⁾だとか、そんなことをやっていましたね。特に記録としてどんな集

会やったとかいうのは残っていませんけどね。・・・これがあります、六・三ストが。50年の6月3日にね、これは全国一斉ストです、全学連が呼びかけた。内容は、イールズ声明反対、全面講和、軍事基地化反対という。京大では、経済と文と理学部、農学部、分校。これ、処分者なしとわざわざ書いています。だから、これだけのところで学生大会が成立して、スト決議で、ストをやっているんですけどね、この時は処分出てないです。

角南さんが学生課長就任前ですね、これは。6月3日にこれがあって、6日に就任していますから。それで、同学会改選があって、水口さんが委員長になって告示9号が10月に出ている。その後は、まず最初にさっき言いました角南さんが出席していた大会で処分者が2人出るんですね。これ以後は、ずっとそういうふうになっていく。

西山 そうすると、朝鮮戦争が50年の6月ですが、正にいろんな決議とかが非常に求められていたときに、ちょうど大学の弾圧的な姿勢も強まってくると、そういうふうに理解してよろしいわけですね。

川合一良 そういうことですね。で、4月に田代さんという方が輔導部長に見えるんですけどね、この人、前は弘前高等学校かな、そこの輔導部長をしていた人で、やっぱりいろんなことを抑える意図を持って入れたんじゃないかと言われてました。今から考えるとね、そんなに悪い人だったかどうか。僕らもちょっと思い込みがあったような気もするんだけど。ただ、田代さんが輔導部長で、角南さんが学生課長で、上下関係があって、ところが仲が悪かった。

西山 その二人が。

川合一良 そうそう。

西山 学生にも分かるように。

川合一良 分かるように。どちらかというと、角

南さんはかなり学生に同情した形で動いてくれて、田代さんというのはね、とにかく無表情で言葉数も少ないし、何を言ってもあまり返事をしないし、というような人なんですよ。だから、ああいう人をわざわざ呼んできて、弾圧させているんだと言われていたけどね。ところがこの田代さんも原爆展の経過の中などでは、いろんな形で学生に協力もしてくれているんですよ。だから、本当に悪い人だったかどうか分かりませんけれども。ただ、この頃大学としては、「病院事件」なんかもあったりして、かなり強面で乗り出したことは事実ですね。

西山 そのへん、大学との関係に話を移していきたいんですけど、今の部長それから課長、そういう人の個性が学生に対する大学の姿勢にも大きく反映されてくるものではないでしょうか。

川合一良 結局はね、評議会とか、輔導会議ですかね、そういうところで決まったことが全部実行されるんですよ。ただ、その過程で、角南さんが涙を流して抗議したりとかいろんなことがあって、学生に見えますからね。だから、そのへんの構造が分かってくるわけですね。そういう意味じゃかなり影響はしたと思います。で、この前、去年の7月に（原爆展掘り起こしの）集会をやったときに、経済学部で放学処分になった人が話をしたら、出席されていた角南さんもすぐに立ち上がって、私にも言わせてくれと。そして、自分がその時どんな思いだったかずっと語っていましたがね。

川合葉子 内藤〔敏夫〕庶務課長という人は評判が悪かったですね。

川合一良 そうそう。後に事務局長になる内藤庶務課長という人がいて、その人が全く文部官僚でね。それがかなりのやり手で、だから実際上大学は総長よりも内藤さんの意向で動いていたのではないのでしょうか、こと学生に関してはね。内藤さんに関しては誰もよく言わない。頭は丸

坊主でね、見るからにそんな感じの人だった。多分内藤さんの意のままに動く人を輔導部長に持ってきたんじゃないかと、そういう気がしますけどね。大学との関係で、そういう人の個性ということですけど、物事を動かす力にはならなかったですよ。大学が決めたことに抗議して、やめさせるといった力にはならなかったけど、なるほどそういう形になっているんだな、ということが分かるような、そういうことがありましたね。

それと同学会を見てますとね、かなり強硬にいろんな抗議はするけどもね、ある段階になると、ほぼ大学の線でまとまってるんですけど、学生が引いているわけです。そういう形で、窓口は全部角南さんと田代さんですからね、そのところではある程度一定の信頼関係はあったようです。で、角南さんもこの間の原爆展の集会の時に、処分、特に「前進座事件」の時の大量処分は僕自身が決めた部分がずいぶんあるけれども、その後の、「教育的配慮」という言葉を使っていましたけどね、要するにフォローはちゃんとやっている、と言われた。そしたら処分された学生が、事実その通りだと言っていました。その時座長をやっていた教養部教授の高橋正立さんは、その辺考えてみると、現在は大学の、権力の末端と学生との関係がそんなものじゃなくなっているし、さびしいことだと言っていましたけどね。

川合葉子 真面目に対応していた、あの頃は。

川合一良 極めて真面目ですね、学生の対応も。

西山 学生も、大学も。

川合一良 大学側も。

川合葉子 女子懇のこと、少し話してもいいですか。ちょっと後になるんですけど。後の方がいいかしら。

西山 いえ、どうぞお話し下さい。

川合葉子 女子学生がとにかく京大に入り始めたんですよ、新制になって⁽¹⁴⁾。皆さん苦勞なされて入ってこられたんです。例えば、家を追い出されて、飛び出して、しばらく洋裁の内職でお金貯めて、そして入学した。とにかくやっとの思いで来てみたら、京都は学生の街なんですけど、女子学生の下宿先がないんですよ。例えば、ある人が入ってみたら、下宿は襖一枚隔てた隣の部屋に男の人が入っている。で、夜中気づいてみたら襖が開いてその男の人が立っていたというわけですよ。何もしないんですけど、開いているだけでびっくりしますでしょ。それからもう一つは炊事をさせてくれない。女の子だから炊事はできる人が多いわけで、させてもらったら食費が安くすむんですよ。ところが、それができない。今みたいなワンルームマンションなんてありませんから、皆襖隔てた普通の家で。女の子だけに貸すなんてところはないわけですよ。女子学生だって言うとな断られるという。

それでね、私が2回生で吉田に来て、早速相談が舞い込んだんです。それが女子懇の始まりみたいなものなんです。もうちょっと前史があったかもしれないけど、覚えてないんですね。毎日のように相談に来られるんです。これはもう、しょうがないから大学へ相談しなくちゃ、というわけで、何人か本当に困っている人を連れて、学生部へ日参したんです。公式にはお昼休みしかないから、お昼休みに困っている人と一緒に行くわけです。そしたら、君そんなのダメだよ、と学生部長が言われたら、連れて行った本当に困っている人は、恐れ多いからとすぐに立ち上がって帰っちゃおうとするわけですね。それを何とか座ってもらって、昼休み中ねばるんです。それをずいぶん続けて、そしたらついに学生部長が、あの時井上〔吉之〕教授という農学部から来られた方だったと思います

が、ついに、それじゃあ捜してきたまえ、と。そんな家があるのならまるごと女子寮にしてもいいと。それでそう言われて、持って帰ったんです。私たち花谷会館⁽¹⁵⁾の2階を集まる場所にしている、そこに女子懇が集まる。そこでこう言われたって言ったらね、すごかったですよ。次から次へと家探しに走っていく人が出るわけですよ。私もびっくりしました。私は京都にもともと住んでいたの、自分は困っていなかったですからね。そして今度は見つけた家を学生課の人に見てもらいに行くわけです。なかなか見に行かなかったら怒るんです、女の人たちが。仕方がないから学生課の人が見に行く。このままではダメだと言われたら、今度は建築学科の学生に頼んで、どういうふうに変えたら女子寮になるかという図面を書いてもらうんです。あの頃は女子学生が希少価値でしたからね、そうしてくれる学生がいて、それを持って行くわけですよ。その間に、こういうことをやっていると壁新聞なんかで、それこそハンコを捺してもらって出すわけですよ。そして、自分たちだけではダメで、宇治分校にいる学生にも呼びかけましょう、と。呼びかけるのに何をしたらかと言いますと、今も宇治との間にバスが出ますでしょ。あのバス券を教養部の先生方に全部寄付してもらったんです。それで何人かが行って、向こうでその、自分たちはお話をしたつもりなんですけど、結果的にはアジったわけですね。

それで、一度新入生歓迎会をいたしました。尊攘堂がありますね、あそこでやったんです。そこに井上部長を招待しましょう、招待といったら来ないわけにはいかないだろう、で、来られたとたんに「女子寮を作ってほしいという運動しています」ということを言うわけですね。で、井上部長はあいさつだけをして早々に帰られる、その後はお菓子を食べて和気藹々とやる

という。その時バスで迎えに行ったものですから、新入生は感激しましてね。ですからたくさん来たんですよ。で、バスを降りて、尊攘堂まで歩いていくんですよ、本部の前から。そして、同学会の部屋の前を通るわけです。デモンなんです、デモに見えちゃってね。同学会の人たちがびっくりしましてね、それから協力してくれるようになりましてね。

その後、署名活動をやったんです。女子学生がみんな、クラスの男子学生から集めてくれて、すごい数になりましてね。もう1年経っていたから私は3回生になっていたと思うんですけど、井上先生だけではダメだ、服部〔峻治郎〕学長先生にお願いに行きましょう、と。お願いということで、ここでみんなひどいことは言わないようにしましょうということで行ったんです。何か意見を言いそうなのは私一人ぐらいだったと思うんですけどね。で、行ったら、代表5人としか会わないという。代表になる人を、できるだけ恰幅のいい人を5人揃えて、その人が署名を持って行ったんですが、さっき言った内藤事務局長が隣りに座っていて、服部学長と内藤事務局長が並んでいた。そこに5人が入って行って、私は外で見ていたんですよ。そして、その署名を学長に渡した。学長は、自分より実務的に力のある内藤事務局長に渡したんです。私にはそう見えただけです。代表はそれまでは比較的小さな人たちだったんですけど、それを見たとき、闘争に変わっちゃったんです。小野理子さんという、今神戸大学の教授をしてらっしゃるんですけど、その方がね、目の前にこんなテーブルがあったんですが、それをドスンとたたいて、学長それは何事ですか、とこうやったんです。それからみんながわあーっという出しちゃって大変なことに・・・。

そして、ついに吉田山の山麓にちょっと小さな建物があって、それを改造して、一部屋二人

かな、全体で十何人しか入れないところを作って。それは大学が買い上げた建物で橋本記念館と呼ばれていました。その次、今度は清風荘に変わったんです。それは現在も女子寮ですね。そういう歴史があって。あれは獲得した、という感じがしましたね。で、一番最初に入った方が寛久美子さんという、神戸大学で中国文学をやっている方です⁽¹⁶⁾。ですから小野さんと寛さんに聞けばもっと正確に。私自身はそんなに苦勞していなかったものですからね、せっせと井上さんのところに行って、井上さんは大変好意的に動いてくれたんです。他のところでは、それこそ告示9号のあった後ですからね、何かにつけて対立しなければならなかったですけど、女子学生がそこで毎日座り込んで話を……。座り込みとは言わないですけど、ソファにちゃんと腰掛けて話をするものですから。そういう広がり方というのを学生の中でしたのですね。

後で出てきます代議員の構成で、私は女子懇の代表で入ったのですが、いちばんつらかったのは例えば実験なんかの時間、寮が確保できた友達と一緒に組んでいるんですけど、代議員大会があったら、あなたは代議員だから早く行ってらっしゃいと言われて、実験させてくれなかったという記憶が……。おかげでいつまでたっても実験が下手だったという……。だけど、それくらい女子学生のまとまりがあった。そして、そういうことは当然の権利だという感じがだんだん出てきたんですね。いちばん最初は、偉い方をお願いしますというふうな感じでした。

川合一良 組織の構成としてね、50、51、52年くらいまでは輔導部ですね。その下に学生課があったんですが。後で厚生課というのができるのかな。それで角南さんは厚生課長に換わるんだ

けど。僕らの当時は輔導部長も学生課長も官僚だったんですね、大学の教授じゃなくて。ところが井上さんの時代、井上さんは農学部の教授だったと思いますけどね、その頃は井上さんの時からだと思いますけど、今の学生部と同じ形で⁽¹⁷⁾。

西山 部長は教官。

川合一良 そうそう。そういう形に変わっています。角南さんは厚生課長としてあとずいぶん長く在任されるわけですよ。だから、確かその時代になって、僕は学生健康保険のことでずいぶん話に行ったことを覚えています。

だから、大学との関係というのは、大学自身が、非常に学生に対する、どう言ったらいいんでしょう、統制というのか、管理を強めるという、そういう姿勢がはっきり50年代に入ってずっと出てきました。それで、内藤庶務課長が絶大な権限を持ってあって、かなりそういうのを動かしていましたね。のちに事務局長になるわけですけどね。だけど、直接の交渉相手はそんなふうで、かなり牧歌的な感じはあったということですね。

西山 掘り起こしの『ニュース』の中に、京大の同学会は他の大学の自治会と違って、大学の中に組み込まれていたという趣旨のご発言がどなたかからありました。また『学園新聞』[1950年10月9日付]に当時の鳥養〔利三郎〕学長の、同学会は大学の指導下にある、という趣旨の発言を載せた記事がある⁽¹⁸⁾のですけれども、そのへんはいかがでしょう。

川合一良 広谷委員長の時、50年ですね、この時にいわゆる民統派が多数を占めるんですけど、それ以前は同学会というのはかなり運動部中心だったんですね。だから、最初から大学の機構というよりも、言うならば官製というか、そういう感じだったんですね。つまり大学が給料を出している人間が2人、同学会の事務員をやっ

ていたわけです。男性1人と女性1人でしかたどね。それから同学会室も大学が貸してくれるわけですね。さっき言った会費も大学が集めてくれる。そういう意味で、一応大学の統制下にあると言えばそういう形だったんですね。学生はそうは思っていなかったですけどね。

西山 49年に民統派が多数を占めるくらいで、同学会の雰囲気自体も変わってくるわけですか。

川合一良 それはもう。各学部自治会はそれぞれ独立したものであり、同学会とは上下関係はありませんでした。しかし緊密に連絡をとっており、同学会総務部は、各学部自治会の動きを十分に把握していました。それから運動総部とか、研究総部とか、文化総部とかあるわけですから、サークルも全部握っているわけでしょう。だから、中央執行委員というのは、いろんな人がやっていましたね。

川合葉子 あまり束縛は感じなかったですね。

川合一良 大学からのね。だから統制下にあるなんていう感じは全くなかったですね。

川合葉子 おそらく終戦直後は、そういう形にしないとできてこないようなこともあったかもしれないですね。

川合一良 だから、同学会の歴史をもっと遡る必要があるんですけどね。

川合葉子 大学全体を民主化しなければいけない、国家としてもそうしなければいけない、という段階では、自治会を大学がこういう形で作っていきこうという……。名前は同学会だったんですけど、戦前は戦争一色になっていた、それを切り換えなければいけないというところで、教育的にもそうしたのかもしれない。

川合一良 その後の経過を見てもね、例えば「天皇事件」⁽¹⁹⁾で解散になるでしょ。で、それがまた再建されますね⁽²⁰⁾。その時かなり好意的なんですよ、大学側は。好意的と言えるか、あるいは意図的かもしれんけど、やっぱり自治組

織がないことには管理しにくいという、それが終始あったように思われますね。それも、いわゆるセクト的な同学会では困るんで、一応全学を組織するようなものと。あの時全学投票やるんだけどね、3500か4500かそれだけ集めれば認めるという、そういう形できて、しかもその時に同学会を解散したにもかかわらず、同学会の部室を自治会連絡会議に貸しているわけですよ。その後もまた再建しているでしょ。やっぱり企業でもね、組合がないと不便だというのがありますね。似たようなところがあるんじゃないですか。

西山 同学会の代議員の構成とか、選出方法などはどのようなものだったのでしょうか。

川合一良 広谷委員長以前の時は知りませんがね、この時から、ちょうど今の参議院みたいなものです、いわゆる全学区というのと学部区というのがあるんですよ。

西山 選挙区ですね。

川合一良 選挙区がね。それで、これ『学園新聞』1954年6月21日付]は54年で大分後ですけど、これ同学会全学区代議員でしょ。ここに梯葉子とあるのが彼女です。女子懇のね。これは4位当選かな。

川合葉子 女子懇は力があつたんです。

川合一良 日本共産党として出ているのもおるしね、いろいろあるんです。ラグビー部から出ているとかね。こういう全学区と、それから学部区がありまして、そこで代議員が、比率はちょっと覚えていませんけれども、選挙されて出てくるわけですね。

西山 学生の側からすれば、二種類の投票をすることになるわけですね。

川合一良 そういうことです。全く参議院と一緒です。これは、普通の選挙と同じですよ、ピラ貼ってね、教室で選挙演説やって。それを各学部の自治会がきちんと投票を管理して、そうい

う形でやってました。

わりと有名な人も出ていますよ。野村秀和さんね、経済学部教授でしょ。彼は日本共産党京大細胞から出ています。それから池上惇さんね。彼は選出母体を書いていないな。

西山 そうすると、いろんな選出母体が政党にあたるような感じですか。

川合葉子 サークルだったり、政党だったり。でも平気だったという感じでしたね。だから本当に開放的。この時は再建したときですから、学生が勝ち取ったという感じ。51、52年はちょっと違った。

川合一良 その頃はね、もっと切迫感ありましたね。

川合葉子 なったら、ちょっとやばいことをいろいろしなくちゃいけないという。

川合一良 第一、勉強できなくなるし。

川合葉子 でも、よく同学会の部室に詰めていたね。授業なんかどうだったのかと思うけど。

西山 中央執行委員というのは、どういうものなのでしょう。

川合一良 中央執行委員はね、執行委員長と副執行委員長とを代議員会で選出するんです。それで、その人たちが執行委員会を構成して、代議員会の承認を得るという形だったと思います。

西山 代議員会の中で投票なり何なり……。

川合一良 立候補して、中央執行委員長、副委員長を選んで、副は2名いたかどうかちょっと忘れちゃったけど。

西山 だいたい何回生が委員長になるんでしょうか。

川合一良 当時は医学部以外は3回生までですから、ほぼ2回生が多かったですね。3回生になると、もう就職活動が始まるし。それから勢力分野ということで言えば、圧倒的に50年以降はいわゆる民統派が多数です。

川合葉子 民統派と、それから体育会です。テニ

ス部とか、サッカー部とかから必ず出てきました。

川合一良 だから、かなり、どう言ったらいいか、きつい方針なんかも決めるわけですけど、そうすると運動部の中執なり、代議員会をやるとその代議員が反対することがよくありました。

西山 きつい、というのは大学と対立するとか。

川合一良 そんなことだとかね。まあ、ストライキとかそういうことでね。それから政治的なことでストライキをうったりするわけでしょ。そうすると運動部の関係の人はそれに反対する。だけど多数決でそれが否決されるという構図がね、ずっと続くわけですよ。それで、一旦同学会が解散になって、この再建代議員会の時には運動部も入ってできるんだけど、運動部協議会を別に作りますね⁽²¹⁾。

西山 53年ですね。

川合一良 で、後に離れていくと、そういうことになりますね。この当時はだから、完全に一体になっていました。私は会計総部の中執委員をやってましてね。で、入って見たらお金が全然ないんですね。困ってしまってね。とにかく1月に執行委員会ができて、4月にお金が入ってきて、大学からもらうでしょ。まず運動部が取りに来るわけですね。で、運動部に重点的に渡してやるんです。そうすると、あとなくなってしまってね、困ったということがありましたけど。

西山 先ほども少しお話しいただきましたけど、会費は大学側が集めると。

川合一良 そうです。大学の会計課に授業料を納めに行ったときに、同学会費も一緒に取られるわけです。

西山 全学生からそのまま普通に取ってしまうと。

川合一良 そうそう。組合費のユニオンになっているところはそういうふうにやっていますね。あれと同じことです。

西山 いくらだったか覚えていらっしゃいますか。

川合一良 覚えていないですね。なんせ、そんなに高くはなかったですよ。会費だけでは到底やっていけなかったんだから。運動部は膨大な金使いますからね、そんなもんだけじゃやっていけない。運動部は、だからそれぞれ各部で先輩のところへ行って金集めをやっていたようですね。クラブごとに。だから同学会なんか入っている必要ない、ということが最初からあったと思います。結局、発言権を留保しておきたいというのがあったでしょうね。

それから、中央執行委員の構成ですけど、その時その時である程度変わってますからね、全部正確じゃないですけどね、ほぼあったものと言え、総務部でしょ、それから総部という言い方してました、会計総部、運動総部、研究、文化、厚生、それに渉外があったかどうかちょっと忘れましたが、そんなものがあったと思いますね。

西山 十数人くらいでしょうか。

川合一良 そうですね。中央執行委員がおって、それから執行委員というのがそれぞれ2名ずつくらいいるんです。どこまでが代議員会で認められたかちょっと分からないんですけど。

川合葉子 そんなことではもめなかったから。もめるのは、やっぱりストライキですから。

西山 当時の学生の関心度はどうだったでしょうか。

川合一良 関心度はね、どうでしょうね。

西山 例えば、代議員の立候補は。

川合一良 それはかなりありましたよ。

西山 自薦他薦いろいろ。

川合一良 ええ。だから倍率は2倍くらいになってたと思いますね。

西山 投票率とかはどうだったでしょうか。

川合一良 投票率もかなり高かったです。ただ、ストライキをやるような学生大会に関しては、

最初に言いましたように、医学部とか工学部はほぼ成立したことがないんです。したがって、私は幸いなことに処分されなかった。実は提案者だったんですけど。

川合葉子 ここ〔『学園新聞』同前〕に出てるのは、「今期の全学平均投票率四五％は同学会第一回選挙の六二・五％に較べると激減してをり」とあるから、再建同学会の第1回選挙は62.5％だったんですね。

川合一良 高いと評価するか、低いと評価するか分かりませんけどね。

川合葉子 学生が大学にこれだけ来ていた、というのは今から思えば驚異ですね。

川合一良 私らね、ようそれで医者になったと思われるかもしれないけど、講義によってはね、120人の一クラスの学生が10人くらいしか出てない講義がありましたからね。で、それが投票するわけですから、かなり高いんじゃないかと思いますけど。一年中一遍も顔を見てないような学生もいましたもんね。

川合葉子 女子懇なんかは、自分が要求を持てますから高かったんですけど。だけど、運動部とかそういうところは。

川合一良 よく分からない。

川合葉子 でも、通すだけはちゃんと通してましたね。

川合一良 だけどそんな上位じゃないだろ。

川合葉子 上位じゃない。

川合一良 自治活動への関心ということになるとね……。だんだん学生運動が激化していきますからね、処分がどんどん出るでしょ。恐怖心があって、やっぱりなかなか……。ある時期はずっと減ってきていたように思いますね。医学部で初めて学生大会が成立したのは、破壊活動防止法案⁽²²⁾ってというのがあって、あの時に初めて成立している。その時は処分を出さないということに結局なったんじゃないかと思います

けどね。

西山 先生はまだ学部で学生でいらっしゃったんですか。

川合一良 そうです。確か、全国的な大きな運動があって、その時は京都では、立命館の総長が末川〔博〕さんで、同志社が田畑〔忍〕さんだった。とにかく学長連が先頭に立って、円山で集会開いてね。えらい盛んな動きだったことがありました。そういう動きの中で、医学部の学生大会が初めて成立するということがありましたけどね。学部によって、かなり……。その間しかも、いわゆる共産党の極左冒険主義というのが入ってきて、火炎ビンが飛ぶでしょ。あれでもって、一般学生がかなり離れていきますね。

とりあえず、今まで調べてきたことが、こと原爆展に限られるものだから、その後のことはあまり調査できてなくて。ただ、同学会の歴史を掘り起こせという声はすごく出ていたんですよ。誰もやらないから。

川合葉子 それを持ち出すと、原爆展（の掘り起こし）が吹っ飛ぶと困りますのでね。

川合一良 とりあえず、そこに決めてね。余力があればやろうかというね。ちょっともう、やる人出てこないと思うな。

西山 ただ、資料的にも早くやらないと。

川合一良 早くやらないと、なくなってしまうからね。第一、記憶に頼らざるを得ない、その記憶があいまいですから……。

だから、関心は初期にはかなりあったけど、学生運動の激化とともに、一般学生は一つは恐怖心と、やっぱり就職に差し支えましたからね。京大細胞の周辺におったというだけで、最終段階でNHKに入れなかったとか、そういうのいっぱいいます。それから外国に行くことができなかったですね。ビザがおりなかったから。川端署なんかがやっていたのかな、かなりマーク

してね、公安情報としてはきちんと出ていたみたいですよ。とんでもない人にビザがおりなかったりというのがありましたからね。

西山 当時の『京都新聞』などを見ますと、一面に処分の話がでかでかと出ていることがあります。「前進座事件」の時は一面トップで「京大生三十数名処分」という記事が。一般紙の雰囲気はどういうものだったのでしょうか。

川合一良 いわゆる全国紙は、そう取り上げていたわけでもないように思いますけどね。

川合葉子 処分とか、逮捕者が出たときは必ず。

川合一良 ああ、処分、逮捕者は出ていたかな。

川合葉子 いろいろな運動があっても、それは……。

西山 これ〔『京都新聞』1950年11月28日付〕は「前進座事件」関係ですけど、京大関係の記事がかなり出ています。

川合一良 やっぱ京都で京大と言ったら、大きな存在でしたものね。

西山 処分された人たちが、でかでかと名前が出てしまっただけ。

川合一良 この後もう一回処分があるんですね。

西山 そうですね。合計36人最終的には処分されています。

川合一良 そうですね。しかも、その時いなかった人だとかね。この時追加処分で松岡健一さんという医学部の4回生が処分されていますけど、この人は後に岡山大学の医学部に1回生から入り直して、結局医者になったけど。

西山 同学会の改選の記事まで『京都新聞』に出ていまして。委員長・副委員長クラスは名前とともに出てまして、驚かされました。

川合葉子 結構、京大というのは。今ほど大学の数がありませんでしたし、それで国立だということで、何かにつけて。

川合一良 京大、三高というのはやっぱりね、京都では大事にされていたから。その三高が教養

部になったわけだし。

西山 次に、同学会と全学連とか、外との関係について少しお話しいただければと思うのですが。

川合一良 (全学連への) 加盟、脱退⁽²³⁾・・・、この間に「病院事件」があるんじゃないかな。

西山 『学園新聞』を見る限りでは、全学連との関係はずいぶん複雑なものがあったように思うのですが。

川合一良 48年当時は全国で組織されて、全学連に入るんでしょうね。ところが、たぶん「病院事件」があって、脱退ということになるんじゃないかと思いますがね。ここらはよく知らないです。で、49年12月に広谷さんが委員長になって、この時に民統派が多数を占めますから、それで復帰になるわけですね。そして、その後の不信任決議というのは、これは結局共産党の分裂問題⁽²⁴⁾です。武井〔昭夫〕委員長を不信任することになる。この当時は、とにかく全学連は本当の組織力を持ってましたから、やっぱり全学連大会に集まって、いろいろ決議をして、それを持って帰って・・・。

西山 同学会から代表を送って。

川合一良 そうです。全学連の代議員というのがあるわけですね。それが行って、方針持って帰って、それにもとづいていろんな全国の運動に参加する。京大は関西のプロモーターだったですね。

西山 他の京都なり関西なりの大学の自治会と、統一的な行動をとることもありましたか。

川合一良 関西学連というのがありましたからね。終始そうだったですね。で、分裂問題で全学連中執がいわゆる国際派になるわけですね。京大同学会に影響力が強かったのは主流派なんですね、結局関西はそういうふうになっていくわけですね。それで武井委員長を不信任して、京大の玉井〔仁〕さんを委員長として送り出すわ

けですね。だからその当時は、京大に限らずどこの大学でも、わりあい全学連との関係は密だったですね。ただ、今も全学連がありますね、それとは相当違うんですよ。文字どおり全国を組織した。方針については、いかにそれを実行するかという論議はやって、ストはけしからんという話はあまり出なかったですね。分かれていくのは、共産党の動きが反映してということだけですね。

西山 では、話を原爆展に移らせていただきます。

お話を始められたらたくさんあるかと思いますが、これもまず先生から思いつくまま話していただけますか。

川合一良 発案者ということになると、これは分からないですね。

川合葉子 きっかけの方が分かりやすい。

川合一良 これはね、時代的背景が大きいですね。さっきちょっと言ったけど、僕らの世代は十五年戦争とともに生まれてきたわけでしょう。だから敗戦というのがものすごく新鮮だったんだよね。いちばん具体的なものというのは、電気をつけてもいいということですね、あれはびっくりして。いつも電気を暗くしなきゃならなかったし、サイレンが鳴ったらもう消さなきゃならなかったしね、電気つけたまま夜生活できるというのは・・・。それから、次にNHKのラジオがメーデー歌とか労働歌をね、ずっと放送しだしてね。非常に一気に明るくなって、そのなかで最初に言った一クラスに左翼が三分の二なんていうことになったりするわけですけどね。それが、私が京都に出てくる前ぐらいから、49年ぐらいからおかしくなってきました。レッドパージもあるしね。いちばんびっくりしたのは朝鮮戦争でね。警察予備隊という自衛隊の前身になるものが作られる。だから、やっぱり何かせないかんという感じは、相当一般の学生に

もあったと思います、共通の体験として。民統派の同学会広谷委員長就任が49年12月で、その翌年は大学側の学生への統制というか、管理機構がずっと作られていく過程がある。そして全国的にもいろんな、そういう反動に対する抵抗運動が組織されていきます。特に京都ではそれに火をつけたのは、たまたま起こった「前進座事件」でした。

それで、一般の、戦争に対する不安だとか恐怖だとかかなりあったところへ、春の文化祭があったわけですね。今は十一月祭になっていますけど、当時は春にやっていた。その時私は同学会の中執だったから、直接関わっていましたが、どういテーマでやろうかということになって、その前の年にわだつみ会が結成されて、『きけわだつみのこえ』がすごく読まれていたので、「わだつみのこえに應える文化祭」ということで、やったわけですね。

その時に、民主主義科学者協会の理学部班と、それに相当するものとして医学部では社会医学研究会というものがあって、それぞれ最初は、別個に原爆のことを扱った展示物を作っていました。医学部では、病理学教室に天野重安助教授という方がおられて、この方、世界的な学者ですけどね。敗戦直後に京大の調査班が（広島に）行って遭難してますね⁽²⁵⁾。その人たちが持ち帰った原爆症の人体の標本がたくさんあったんですけど、天野先生はそれをもとにして、毎年学生に原爆症の講義をされたんです。正規の講義の中でしたけど、当時はそれが非常に珍しかった。名講義でした。それが学生に非常に感動を与えたものですから、それを一つもとにして、それから、アメリカのロスアラモスの原爆の研究所がありますね。そこで出してる「原子爆弾の効果」という資料など、そういったものを集めてパンフレットを作って、勉強会を始めたんです。それをもとにして、医学部の展示物

を作るわけです。理学部では、『自然』という雑誌がこの「原子爆弾の効果」を翻訳して、毎月掲載していたんですけどね、50年2月からね。理学部の学生が、あれは中央公論社ですけど、そこまで行ってね、資料をもらって来ました。それで理学部の展示を作って、どちらも西部講堂で展示するわけですね。天野先生と、理学部の木村毅一さんという、この方は調査班で行かれた方ですけど、天野先生も本当は行くはずだったんです。ちょうどあの時、例の山津波で車が止まっていけなくなったんです。その二人を中心に講演会をやるわけです。実は、講演会が成功したことについては、ちょっとペテンが……。

西山 どちらの先生にも、もう片方の先生がお引き受け下さっていると言って。

川合一良 ばれちゃったんですけどね。その二つの展示物と、講演会が大成功だったし、『学園新聞』[1951年5月28日付]にも修学旅行生などが来て、非常に感銘を受けたと書いてありますね。それで、これいっぺん市民に見せなあかん、ということになった。その展示が終わる頃には、もう各学部の民科を中心にした学生組織に広がっていったわけです。法学部では原爆の国際管理の問題とか、工学部では建物に対する影響とか、農学部では植物に対する影響とか、そういうふうなことを勉強し始めていました。それをじゃあ、百貨店でやろうということになって交渉が始まった。だから、草の根というか、自然発生的なものとして出てきているわけです。

川合葉子 びっくりしたんですけど、春の文化祭の二つの原爆展は、ばらばらにやっているんです、同一構内で。お互いに相手がやっているとは知らなくて。

西山 全く別のルートから起こったわけですね。

川合葉子 で、これを広げなくちゃと両方が思っ

て、同学会が自分たちのを認めてくれたと思っています。両方とも原爆展と言っているから、区別がついていなくて、聞いてみたら僕達が発案者だと。

川合一良 医学部は、2回生の藤原〔憲和〕さんが中心になっていた。その時僕と一緒に同学会の中執の文化部をやっていた益子〔博〕さんという人がおるんです。益子さんが藤原さんと高校が一緒に仲がよかったんですね。で、掘り起こし作業が始まって益子さんに会った時、「僕が理学部に交渉に行ったよ」という話をしましたが、それは同学会の中執としての立場で行っているみたいですね。二つの会は成功裡に終わりましたが、同学会主催の文化祭ですからね、だから益子さんが連絡をして、広げようとする動きをされたのです。

その間にね、西山〔卯三〕先生を中心にした新日本建築家集団、NAUという組織がいち早く動いているわけですね。それで、同学会としては、どういうものにするかということを討議して、『原爆の図』を持ってこようという意見が出ました。その交渉には井爪〔敏之〕さんという人が交渉に行っているわけです、丸木夫妻〔位里・俊〕のところへね。それから、百貨店は大丸、藤井大丸とか丸物に申し込みました。高島屋は当時なかったですから。大丸には体よく断られた、非常にスマートに断ったそうです。空いていませんと言って。藤井大丸もだめだ、となると丸物しかない。で、丸物に焦点を当てたわけですね。上層部のことは分からないけど、最初はOKだったんですよ。その時は角南さんもある程度動いてくれて、大里専務という方が京大の出身者だったので、かなり好意的にやってくれたようです。その後にはたぶん、警察か、あるいはもっと上のGHQあたりからの、丸物上層部に対する動きがあったのかも分かりませんけどね。いっぺん断られているわけですね。

それがまた、いろんな交渉の中で復活した。そんなにはげしい交渉というものではなかったようですけどね。

そういうことで、結局丸物でやれるようになったが、実は丸物の現場でもかなり一所懸命支えてくれたグループがいたことが後に分かってきているんです。当時は全く分からなかった。それから『都新聞』にも京大出身の記者がいて、丸物の企画担当の人も京大出身で、その人たちが支えたということが分かってきています。だけど、学生はそんなこと知らないからね。ピラも残ってますけど、丸物が断ったからけしからん、デモかけろという動きもやっているのです。

そういう交渉を同学会としてやりながら、現場では5月に学内の文化祭、そして7月には丸物でやりますからわずか2カ月しかない。その間に広島、長崎へ行って資料集めやったりね、もういっぺん中央公論社へ行ったりね。いろんなことやって資料集めして、それを全部西山先生が写真にとって、それをパネルにしていくのです。パネルは190枚、立派なパネルでした。作ったのは、工学部の学生と、工芸繊維大の学生と、美大〔京都市立美術大学〕の学生。これは、場合によっては徹夜でやったようです。

それから各学部の動きですけど、医学部、理学部はそういう形で、春の展示を拡大したものを作ったわけでしょう。文学部では『原爆体験記』というのを編集した。中心になったのは、宮川裕行さんという被爆者の学生です。工学部はそういう格好でパネル製作をしている。法学部は田畑研、田畑茂二郎先生を中心に、国際法の問題なんかをやっているんですね。この間亡くなった当時大学院生の川口〔是〕先生が、ずいぶん相談に乗られたようです。農学部は民科を中心に農作物に対する影響などをやっていました。そういうものを作っているのは、現場の学生です。いわゆる活動家の連中はむしろ走り回って

いたですね、いろんなことで。東京に交渉に行ったりとかね。

この間に、もう一つ動きがあるんですけどね、当時世界青年平和友好祭というのがあって、その日本版というか、これをやろうということになった。その時、『学園新聞』〔1951年6月4日付〕に出ているように、西部講堂である会議がもたれたわけですね。京都のいろんな大学から集まって。友好祭を三部作でやるということが決定された。第一部が原爆展で、第二部が総合科学展だったかな、第三部がいろんな催し物ということで、そういう構成でやりかけるんだけど、結局これは分解することになるんですよ。原爆展に関しては、たぶん政治的色彩をなくせという要求が大学から出され、丸物からも出たようです。そしてそれをはずすということで最終的に妥協したようですね。これは青木委員長も覚えていないようです。たぶん妥協したんだろうと言っている。『学園新聞』を見ると、ある時から世界青年平和友好祭という言葉が出なくなります。その時におそらくその妥協があったんだろうと思います。だから、左翼的な動きとしては、そういう国際的なものの一環としてやろうとしたんだけど、交渉の過程で、むしろ原爆展をやること自身が大事なんだという認識に変わっていったね、同学会もそういうふうな考え方を変えて、それで原爆展は成功していった。総合科学展だけは、吉田分校でやりました。それは『学園新聞』〔1951年7月9日付〕に出ています。ファイヤーストームなんかもやっていますね。そういう形でばらになったものはやられているんですけど、それは世界青年平和友好祭と銘打ったものではないんですね。

それから大学の対応ということでは、総長は何というのかな、非常に馬鹿にしたことを言っているわけですね。ちゃちなことでは原爆のこ

とは分かんないのと。だから、総長は非常に非協力的なんです。学内から、標本だとかそういうのを持ち出すことを禁止するんですよ。田代さんは、その間で右往左往しているわけですね、いっぺんいいと言ってみたり、あかんと言ってみたり。ただ、現場では大学側もいろんな機械を貸してくれたり、そういうことがあるわけです。

西山 それは個々の教官が貸してくれると。

川合一良 そうです。それまで大学として弾圧することはしなかった。

川合葉子 田代さんが右往左往しているなかで、手形に裏書きをして⁽²⁶⁾。

川合一良 そう、そういうこともあるわけです。この間の動きは、ものすごく急速度だった。

川合葉子 本当に、あの人もこの人も、という感じ。

川合一良 もう一つ大事なことは、宣伝方法なんかで、スチール展をかついで市内を回ったりね、それから労働組合だとか、青年団だとか、そういうところを全部くまなく訪ねまわって、大宣伝をやっています。そして、経営的にも成功しているんですよ。実を言いますと、それまで同学会にはお金なかったわけですけどね、同学会費にだいたい入れてもらいましたし、広島原爆孤児の施設に寄付をしたり、それから帰郷活動がこのときもあるんですけどね、その費用にも役だった。中岡〔哲郎〕さんが原爆展センターというふうに書いているんだけど、これ〔中岡哲郎『現代における思想と行動』〕は、三一書房が出版200点記念で募集したんですね。彼がそれにこの論文を出したら当選して、その論文なんです。この中に原爆展センターが出てくるんです。後に彼に会ったとき、そんなこと覚えていなかった。

とにかく原爆展センターを同学会の中に作って、そこで大型のパネルだとか、たくさん作っ

た小型のパネル、それを全国に発送してね、各地で原爆展をやっている。関西ではいちばん大きなことやったのは、高槻ですけどね。高槻では、高槻市と京大同学会共催でやっているんです。ところが、隣の茨木とか吹田では弾圧されてできなかった⁽²⁷⁾。枚方では小さいのをやっています。大津も路上で展示したのだけど、小畑〔哲雄〕さんが逮捕されたりとかいうことがあります。京都府下でもあちこちでやっているんですね。それがさらに、阪大とか、信州大学とか、静岡大学とかに拡大した。北海道は全道四十何カ所でやっています。中岡さんの文章を読むと、当時レッドパージで基幹労働者の中の活動家はほとんどいなくなったでしょ、だからちょっと左翼的な運動は全部弾圧されていたんだけど、こと原爆に関しては、やっぱり弾圧しにくいわけですよ。だから、現場の労働者だとか、青年団とか、高校生の間では、それが非常に貴重な運動の手がかりになった。で、全国にそれが広がったんです。こと京都であったというだけではなくて、その後何年かの平和運動の、組織のもとになっている。おそらく、我々の想像では、ビキニ事件が起きたときにあれだけ全国に広がった基礎には、これらの原爆展があったと考えられる。あるいは、天皇事件がずっと広がったのもね、そういう背景があったんだろうと考えているわけですけどね。

西山 京大以外の原爆展の話になりましたので、その話を少し深めたいのですが、阪大のことは京大の『学園新聞』〔1951年10月1日付〕にも出ていますし、東大の五月祭でも展示があったということですね。

川合一良 そうそう。

西山 それから、この年の9月ですから、原爆展が終わった後ですけど、浅草の松屋とか、渋谷の東横デパートで開催予定だということが東大の学生新聞に出ていた〔『東京大学学生新聞』

1951年9月13日付〕のですが、このへんの話はどうだったのでしょうか。

川合一良 あれはね、あの当時学生の新聞連盟か何かがあるでしょ。それに掲載されていました。それから、久保〔よし子〕さんが書いた文章〔『原爆の図』とともに一丸木俊さんに聞くー〕女たちの現在を問う会編『〈日本独立〉と女たち 銃後史ノート戦後篇2』インパクト出版会、1987年〕がある。この中で丸木さんが京都のことを書いているんです。北海道でやったことについてはね、北大の教授をしていて退官された松井〔愈〕さんという人がおられて、その人が思い出の記みたいなのを書いていて、その中に北海道における原爆展の状況を詳しく書いておられます。それから、『学園評論』の中にね、学生の北海道での活動を詳しく書いている。

西山 東京の話などは、京大とは直接の連絡があったのでしょうか。

川合一良 あったんだと思いますよ。原爆展センターでやってたんだと思うんですけどね。

川合葉子 実際に、全学連大会の時に小畑さんが行って、その途中、帰りか何かに横浜とかいろんな所で原爆展してまわって帰ってくる。

川合一良 当時の全学連大会は、非合法でやられたそうですね。だから、どこか大学じゃないところでやって、そこへ彼が出て、それから横浜へ行ったんやね。横浜ではほとんど組織がなくて、横浜国大に1人、女子学生の方で活動家っていて、その人と2人でいろんな準備をして、各労組とかそういうところで、丸物で使ったパネルを持って行ってね、それを展示してまわった。

川合葉子 大変だっただろうと思うんですけどね。原爆展関係の広報は、小畑さんがおやりになって。

川合一良 6月からの同学会は、彼が庶務関係をやっているわけです。彼に聞かれたら、あのことともずっと知ってます。

西山 もう少し準備段階のところでお伺いしたいことがあるんですけど、いちばん疑問に思うのは資金のことなんです。『学園新聞』〔1951年6月11日付〕には、生協が5万円寄付するとかしないとかありますが。

川合一良 あれね、『学園新聞』は結局しなかったように書いてあるでしょ。西山さんはした、と言っておられた。生協が出したんだよ、と。たぶんその方が本当だと思いますけどね。それが一つありました。それからね、カンパを相当広範囲にやってますね。それと大きかったのは、例の裏書きの話だけど、印刷費が後に回ったということですね。ああいう形で、全部後に回しちゃったんですよ、支払いはね。それから、『原爆の図』に関しては、一銭も払ってないということです。これが大きいですね。それどころか、丸木さんが絵を描いてくれて、それを売ってお金にした。それと、かなり観客が入ったものだから、そのお金がどっさり入った。だから、それで十分、全部支払って、なおかつ少し残ったということですね。

それから、税務署がね、税金かけると言って来たんですよ。左京税務署がね。その時の交渉は、僕立ち会っているんですけど、結局無税にしてくれました。

川合葉子 それは、広島、長崎の孤児に寄付するという名目で。で、寄付しに行った人がいるんです、ちゃんと。いくらかは知らないけど。

川合一良 後に東松山市の丸木美術館に行ったんですよ、当時の委員長の青木さんと二人でね。話をいろいろして、そういえばあの時お金を払いましたかね、と青木さんが聞いたら、いやもらった記憶ないよって。じゃあ、払ってないって。丸木さんたちも若かったし、特に四部と五部が日本初公開だったんですね。だもんだから、小さなところでやってる会はあったけど、ああいう駅前のデパートでやるというよう

なことはなかったですからね、かなり熱を入れておられたんですね。毎日会場につききりでしたからね。そういう意味で言うならば、そんなに多額のものは払ってないと思います。

西山 それから、『都新聞』の後援ということですが、この新聞社はどういう新聞社なんだろう。

川合一良 京都ではかなり読まれていた新聞です、地方紙で。ちょっと正確じゃないけど、井尻さんという京大出身の記者がいて、この人が非常に熱心に取材していましたね。

西山 後援とは、具体的にどういうことをしたのでしょうか。

川合葉子 記事を書いてくださいました。

川合一良 それから、宣伝カーか何かを借りたんじゃないかな。

川合葉子 『都新聞』の記者さんと、丸物の中の方がわりと親しかった。

川合一良 全くの想像ですけどね、たぶん『都新聞』の記者の方と、丸物の、まだお会いできていない人ですけどね、その人はある程度の活動家じゃなかったかな、という感じがしているんですけどね。だからかなり積極的に受けとめて、新聞社の方も関わってくれたんじゃないかと思うんです。当時の丸物労組というのは全百貨労組というのがあったらしいけど、いちばん強い組合だったんです。

これ、『国際新聞』という一般紙ですよ。その小説の挿絵の中に、「原爆展」という広告が載っている。

川合葉子 一つの風俗になっていたというわけですね。

川合一良 このことを覚えていてくれた人がいて、アンケートでこんなんがあったよ、というのをくれて、またこれをわざわざ捜した人がいて。執念やね。

川合葉子 今京大で何かするといっても、風俗に

までなりませんでしょ。だからいかに当時は権威があったというか。

西山 そうしましたら、そろそろ当日の様子に話を移したいのですが。

川合一良 それがね、記憶がないんですよ。ともかく、パネルが190枚並んで、それから工学部の西山さんのところで作ったパノラマがあってね、広島のパノラマですね。それから『原爆の図』が並んでいるわけですね。その前に学生が、何人くらい立っていたかな、ともかく毎日数十名がそこでしゃべるわけです、観客に。一つ一つ説明していくわけですね。それを朝から晩までやる。それが10日間続いた。その時の観客の声は『学園新聞』〔1951年8月27日付〕に出てましたね。あのおりだったんだけど。被爆者の方が来てね、「爆撃も受けなかった京都でえらそうなことを言うな」と言っているんですね。説明していた学生が「いや私も神戸で空襲にあったんです」と言って、やっと許してもらったりね。だから、普通の展覧会と違うのは、そうやって見せるだけじゃなくて、つきっきりで説明したということ、それが全然違う。

川合葉子 説明は、わりと飛び込みでなさった方が多いみたいですね。

西山 学生が。

川合葉子 学生が見ているうちに、自分でもしたくなってきた方だとか。実際に被爆者の方は、こんなもんじゃないんですよ、と言いながら説明なさった。宮川さんなんか、そう。

川合一良 『原爆の図』は悲惨な絵だけでも、実際はこんなもんじゃないと言ってね。

川合葉子 もっともっと大変だったって。それから、展示を作ったけれども、分かりにくいですよ、ね、原爆の原理なんか。だから、知っている人が説明をし始めて。どこの部分もそうしないと分かってもらえないから。で、『学園新聞』の方は、その時に特集号を売ったんです、そこ

で。で、会場がちょっと暇になって、説明役の学生が食事に行きますよね。

川合一良 社員食堂で。

川合葉子 食堂で食べさせてもらったんですけど、説明役がいないときに観客が来たら、代わりにその『学園新聞』の方が説明したり。

川合一良 『学園新聞』の記者は第三者的な態度を取る人が多かったのだけれど、この時に限ってはね、会場で新聞を売って、自分がしゃべって、当事者になっていました。

川合葉子 その間も確かずっと街頭ではスチール展を続けていて。

川合一良 本当の活動家と言われる連中はね、街にスチール展持って歩いていたら、原爆展を見てないんですよ。

川合葉子 私も用意が完了したところしか見てないです。出来上がって、人が入ったところは見に行けなかったんです。

川合一良 僕は、会場におったという証拠はあるんだけど、自分では覚えていない。

川合葉子 責任者の人は、みんな一緒に丸木さんたちと詰めていて、そういう人はちゃんとね、色紙をもらっていらっしゃる。いたという証拠ですよ。もっとも雑用やってたから……。

川合一良 丸木さんが、バケツに氷を入れてトマトを持ってきてくれて、それを食べたとか、そういう断片的な記憶はある。

西山 展示のパネルは、先ほどお話しになったような、例えば法学部でしたら政治の話とか……。

川合葉子 アメリカが原爆実験をしたら、ソ連がすぐに追いつきますでしょ。前年、50年に水爆をやるんですよ。すぐソ連が追いつく、そういうちょうど過渡期ですから。アメリカで何とか国際的に管理しようという動きが始まっていますから、そういう国際情勢を。

西山 それぞれの学部が、農学部でしたら農作物

への影響とか、をパネルにしたわけですね。

川合一良　そうです。原爆展のいちばんの特徴は、一般学生と言われる人たちがね、特に秀才がね、勉強のできる人が参加したんですよ。一つは朝鮮戦争が始まって、ほとんど全部の学生たちが暗い感じを持って、じっとしておれない感じがあったということと、自分の専門性を生かしてやれるということ。例えば、同学会の代議員に出るといったらね、やっぱり医学部であろうと理学部であろうと、ちょっと一定の決意がいるわけです。勉強とは別のことをせなならんから。専門の勉強はおろそかになるわけでしょ。そうじゃなくて、（原爆展は）自分の専門性を生かして市民にアピールできるというところが、たぶん学生をとらえたんだろうと思う。そういう運動というのは、あまりないですね。だから、発端は現場から始まって、同学会は一応それを受けとめた形にはなっているけど、よくある形態の学生運動、いわゆる自治会が戦略戦術を決めて、下へ降ろしてやるという方向とは全く逆なんです。そういうことで、ずいぶん広がりが大きかった。

だから、当時のことを、去年でも思い出そうと呼びかけたら、80人前後が集まってね。しかも、その中には当時何も活動家でなかった人が半分くらい来ているんですよ。そして、本当に自分の思いを語る、ということがありましたね。どっちかという、真面目な一般学生だった人が、一所懸命やって、未だにその思い出を大事に持ってる。宮川さんなんかは、今広島で語り部運動をやっているんですよ。高校生とか来るでしょ。語り部も大分少なくなったんだけど、当時の体験を話して聞かせています。それから韓国人被爆者の救援やったりとか、未だにつながりを持っているわけですよ。さっきの村上さんは、神戸で反核医師の会の中心にいてね、未だに神戸で原爆展やっているんですよ。その医

師の会でね、テレホンカード作ったり、毎年あちこちで原爆展やったりというようなことをやっているんですよ。もともとはエスぺラント活動一本だったけれども、未だにそういう活動を続けているんですよ。だから、原体験という形で、当時の学生にはかなり大きなものを残したわけですね。

西山　そろそろ最後の、終了後の話に移りたいのですが、まず、これは後の天皇事件と関わって、秋の文化祭でもう一度やろうという話があったと思うんですけど、そのことについてのかなり具体的な議論もなされていたのでしょうか。

川合一良　そうです。一つはね、総合原爆展は学内でやらなかったでしょ。それで、春の分は、理学部と医学部だけだからね、これだけ総合的なものはやってないから、もういっぺん学内でやろうということになった。それから、いわゆる活動家と称される人たちは原爆展の期間中は見てないから、やってくれというのはかなりあったし。それから、学生に見せようという。（原爆展は）夏休みでしたから帰省していた学生たちも見ることができなかった。それで同学会としてきちんと企画したわけです。ところが、会場問題とか、日にちの問題でもめて、もめているところに「天皇事件」が起きて、全部禁止になった。

西山　その中身としては、夏に行ったものと同じものをということですか。

川合一良　同じものです。

川合葉子　次に水爆展⁽²⁸⁾をやるんですね。

西山　そうですね。もしできたら、簡単なお話も。

川合葉子　それは、吉村〔克之〕さんだとか、小野〔一郎〕さんは帰郷活動をやっていたんじゃないかな。

川合一良　小野さんは被爆者です。吉村さんは再建同学会の副議長をやっていた人ですね、うた

ごえ運動の人。その人が、自治会連絡協議会で
すか、同学会 BOX を借りて、そういうことを
やっていたと言っていました。

川合葉子 当時の写真があります。この頃になる
と、学生が写真機を持てるようになるんです。
原爆展との違いは、ちょっと裕福になったとい
うか、余裕ができたというか。私は始終同学会
の方へ行っていたから、字を書く手伝いとかは
した覚えがありますが、プロセスはむしろ、
加藤利三さんとか、そういう方が覚えているか
もしれないです。

もう、原爆展だけではだめで、水爆の原理ま
で入れなければ時代に遅れるというか。全部書
き下ろしになっていますね、だから。

[註]

- (1) 1950年11月25日、同学会演劇部が革新的演劇
集団だった前進座の俳優を迎えて講演会を開催す
ることを計画したのに対して、当初大学側は集会
を許可していたが、当日になり警察より立会を要
求してきた。大学側は警察と交渉を行ったが、予
定されていた開催時刻となり、現場では待機して
いた警察官と学生とがもみ合いになり結局集会は
中止された。同学会は、この事態に抗議する学生
大会を大学側の禁止にかかわらず強行し、デモ、
座り込み、川端署への抗議などを行い、これに関
連して4名の放逐をはじめ合計36名の学生が処
分を受けた(京都大学百年史編集委員会編『京都
大学百年史』資料編2、2000年、574・620ペー
ジ)。
- (2) 1953年9月の学生選挙権に関する自治庁通達問
題を契機に集まりを持ち始めた京都の各大学の寮
生が、10月31日に京都府寮連合の結成大会を開
催するに至った。当日は、府下27寮(正式参加
は19寮)の学生が集まり、「相互に援助し合い、
協力して生活の擁護、向上に努める」との結成宣
言が採択され、川合一良をはじめ7名の執行委員
が選出された(『学園新聞』1953年11月9日付)。
- (3) 1949年の新制大学発足とともに制度化された一
般教養課程を、京大では分校と称し、宇治(現在
の宇治キャンパス)と吉田(現在の吉田南構内)
の二箇所を設置、1回生は宇治分校、2回生は吉
田分校で講義を受けた。宇治分校は1961年まで
存続した。
- (4) 1949年4月、医学部附属医院は、同医院での勤
務を希望していた厚生女学部卒業生33名のうち
10名を不採用とした。これを不服とする不採用者
6名がハンガーストライキを開始し、交渉現場に
も戦後初めて警察官が入り学生3名が逮捕され
た。この問題は、全学連全国大会会場の使用許可
をめぐる問題に結びつき、総長室前での座り込み
に対して、警官隊が導入された。結局事件に関係
したとされる学生2名が放逐、4名が停学処分と
なった。「看護婦事件」とも言う(前掲『京都大
学百年史』資料編2、574・610～618ページ)。
- (5) 民主統一戦線派。共産党主流派の影響を受けた
学生運動の一派。京大では1949年12月の同学会
代議員選挙で多数をとり、「天皇事件」による同
学会解散まで多数を維持していた。
- (6) GHQの参謀本部第二部長ウイロビーが、1950
年6月17日に内閣官房長官と警視総監宛に、公
共の安全を害するおそれがあるか、占領軍当局の
方針に反するデモに発展する可能性のある集会等
を許可しないと送ったメモランダム。各地の公安
条例に影響を与えた。
- (7) 道路その他屋外の公共の場所での集会や集団行
動への規制を定めた条例を指し、1948年の大阪市
が制定の最初とされている。京都市では1949年6
月に制定されている(正式名称は、「集会、集団
行進及び集団示威運動に関する条例」)。
- (8) W.C.イールズは、GHQの民間情報教育局(CIE)
の顧問。1949年7月の新潟大学を皮切りに各地で
共産主義教授追放の講演を行ったが、1950年5月
には東北大学、北海道大学で相次いで学生の反対
で講演会が中止となった。
- (9) 1950年告示第9号の全文は以下のとおり(前掲
『京都大学百年史』資料編2、618ページ)。

「告示第九号

学生生徒一般

本学は学生ストライキを禁止する。従ってストライキを議せんとする学生大会及びストライキを目的とする一切の行為を許さない。蓋しストライキの如きは大学が国家社会から委託された研究及び教授の重大な任務遂行を阻害するからである。一日と雖も大学がこの任務を放擲することは大学の自殺行為にほかならない。

伝えられる教授追放問題は党籍の有無や思想の如何によってその地位が左右されるべきものではない。況んやリストの如きに至っては全く大学の関知せざるところである。大学は飽くまでもその本質と良心とに基く自主性を尊重し、その人事については伝統を継承して自主性を守りぬく。

学生諸君が師を愛し大学を憂う真情は何人も共感するところであるがその意思表示は終始知性と良識とに基いたものでなければならない。諸君の公正な意思が大学の使命と秩序とに従って表明されることは何等抑止されるものではなく大学の期待するところである。ただ大学の自治学問の自由を守るには常に深い反省と強い責任感とにより裏づけられねばならぬ。大学を信頼せず学生たるの本分に背反して強いてことをなすが如きものあらば、自ら大学人たることを放棄したものとして大学から去るべきである。

有為にして信頼する全学一万の学生生徒諸君。今こそ諸君は大学の自治と学問の自由との真の意義に深く思いを致し諸君の自主性と批判力を以て本学の将来の発展に寄与せんことを切に希望する。

昭和二十五年十月十六日

京 都 大 学」

(10) 1951年2月から3月にかけて「京都大学学内集会規程」「京都大学学内団体規程」「京都大学学内掲示等規程」という学生の集会・運動を規制する三規程が制定・施行された。これにより、学内集会実施や学内団体結成および、掲示・散布あるいは配付用の印刷物・ビラ・プラカードなどの事前許可制が定められた。

(11) 1951年4月16日付同学会作成のビラ「言わせ

ぬ聴かさぬ集らさぬ軍規の様な学内規定を撤回させよ」(川合氏所蔵)のこと。

(12) 下鴨署前でビラをまいた小野信爾(文学部)が地方公務員法違反で逮捕された事件。1951年4月11日、重労働3年罰金1000ドルの判決が言い渡されたが、5月26日に重労働2年に減刑された。また、大学から小野に出された退学勧告は、学生の反対で撤回された(『学園新聞』1951年4月30日・6月4日・7月1日・7月5日付)。

(13) 1950年3月にストックホルムで開かれた平和擁護世界大会で採択された核兵器禁止についてのアピール。各国で賛同者の署名運動が行われ、全世界で5億人に達した。

(14) 正確には、京大に初めて正規の学生として女性が入学したのは、旧制度のもとにあった1946年度で、17人が入学した。なお、川合葉子氏が入学した1951年度に入学した女子学生は44人、全入学者(1328人)のわずか3.3%に過ぎなかった。

(15) 1947年に建てられた京大正門東側の木造二階建て建築。1945年9月17日に枕崎台風による山津波で遭難した原爆調査班〔註25参照〕の一員だった花谷暉一(当時大学院生)の兄の寄贈になる。

(16) 笈の回想によれば、「私自身は、困窮度調査の結果、最終的には入居を遠慮したのだが、親しい友人がいたのと、すぐ近くに下宿していたこともあって、しょっちゅう遊びに訪れてい」たという。前掲「仮女子寮(橋本記念館)の一時期、そして角南(厚生課長)先生」644ページ。

(17) 戦後すぐの期間における学生(輔導)部長は以下のとおり。

木村素衛(文学部教授) 1945.10.15～1946. 2.12

井上吉之(農学部教授) 1946. 4. 1～1950. 3.31

田代秀徳 1950. 3.31～1952. 2.16

井上吉之 1952. 4.20～1953.11.30

これ以降学生部長には京大教授が就任しており、したがって田代のみが京大教授以外からの就任ということになる。

(18) 鳥養は同紙の取材に答えて、「職員組合と同学会共催の座談会の問題も職組は大学と対等の組織であり、同学会は大学が指導する団体で」と述べ

ている。

- (19) 1951年11月12日に京都府視察の一環として天皇が京大に来学、本部本館前に教職員・学生ら約1000人が出迎えた。天皇が本館へ入った後、プラカードを掲げた学生らを中心に学生たちが「平和の歌」を合唱し、天皇の車を取り囲む事態となったので、大学の要請で警官隊が入構し現場の整理にあたった。また、同学会は戦争責任と冷戦が開始された世界の現状への認識を問う天皇宛の「公開質問状」を作成し、大学側が受け取りを拒否すると同日それを学内で配布した。天皇の視察は無事終了したが、学生たちの行為に対して新聞を始めとした世論の非難が浴びせられ、服部学長と青木同学会委員長は衆議院に参考人招致されるに至った。学内においても、同学会は解散となり、中央執行委員8名は無期停学処分となった。
- (20) 1953年6月に再建に関する全学投票が行われ、4568人の賛成により再建が決定した。
- (21) 『学園新聞』1953年6月22日付によると、同月15日に京都大学体育会の発会式が行われており、「これは昨年暮から運動部協議会を中心に計画されていたもので」「同学会とは一応別個の形となる」と記されている。
- (22) 破壊活動防止法（破防法）は、1952年7月21日に公布された治安立法で、暴力主義的破壊活動を行った団体に対して、活動の禁止・解散の指定等の措置をとり、また個人に対しても刑法規定以外の罰則を科すことができると定めている。これに対して学生や労働組合などによる反対運動が展開され、京大でも6月4日に各学部で集会が開かれ、街頭デモなども行っている。医学部でも学生大会が成立したことが新聞に出ているが、破防法反対を満場一致で決議したものの「場内では輔導委員の二教官に自発的に退場を求めたり、ストを

決議しては、患者の生命に関わるという四回生の深刻な意見が出されるなど、終始慎重な態度で医学部らしい大会だった」と記されている（『学園新聞』1952年6月9日付）。

- (23) 同学会は、全学連に1948年10月に加盟したが、1949年9月に脱退、そのまた翌年の1950年4月に復帰、1951年6月には関西学連が全学連中央執行委員会に対して不信任を決議している。
- (24) 1950年1月、国際的共産党組織であるコミンフォルムが、日本共産党の平和革命方針を批判したのに対して、日本共産党内部ではは批判を受け入れがたいとした「所感派（主流派）」と批判を受け入れるべきとする「国際派」の対立が生じるようになった。
- (25) 1945年8月の広島への原爆投下の直後から、京大では理学部と医学部による被害状況の調査と治療方法の検討が行われていた。同月27日には陸軍より正式の依頼があり、両学部から要員を募って京都大学原子爆弾総合研究調査班が編成された。班員は40人以上に及び、広島で被爆者の診療および調査研究を行った。しかし、9月17日枕崎台風に伴う暴風雨により、調査班が滞在していた大野陸軍病院が山津波に遭い、多くの患者とともに真下俊一・杉山繁輝両医学部教授をはじめとして11人の班員が殉職した。
- (26) ポスター印刷時には支払いに必要な資金がなかったが、田代輔導部長が手形に裏書きをしたことによって代金後払いが可能になった（川合氏の教示による）。
- (27) 以後の調査で茨木では成功していたことが判明した（川合氏の教示による）。
- (28) 1954年6月18日に京大吉田分校内の新徳館で開催された。